

父親の役割

鶴 弘 道

(一)

校内暴力、登校拒否、神経症などの問題をひきおこす子供が、最近ふえている。その原因はどこにあるか。これには、いろいろの原因が考えられるが、その一つは、家庭の在り方に問題があることは確かである。その中でも特に、父親の在り方に問題があると思われる。

このことを指摘した言葉は沢山あるが、今手元にある本にそれを求めると、まず俵 萌子氏の著書『父原病の子どもたち』がある。この本の前半は、警視庁世田谷少年センターの岩佐寿夫氏、聖マリアンナ医科大学の岩井助教授との対談だが、この中で岩井氏は次のように語っている。「家庭内暴力児と登校拒否児の家庭には共通性があります。ズバリ、父親不在の家です。この場合、文字通り父親がいないというわけではなくて、父親の力が不在ということです。」⁽¹⁾

次には、鈴木秀男氏の『幼時体験』がある。この本の副題は「母性と父性の役割」とあるが、この中で氏は次のようにのべている。「神経症や心身症は、乳幼児期における母親との交渉に一次的な原因があるだけでなく、父性を欠いた父親を持つことが、発症の必要条件になるということになる。言いかえると、幼児の母親との交渉から、子どもがなんらかの心身の障害を持ったとしても、父親いかによっては、その障害が克服されるということである。」⁽²⁾

森田宗一氏は「非行少年にみる父親像」の中で、次のようなケースを紹介している。「A少年が非行少年として、家庭裁判所で調査審判を受けるようになると、母親はすっかりオロオロしてしまい、父親は『親の体面をけがす不孝者』という言葉を繰り返していた。しかし、やがて担当の調査官や裁判官から、少年の非行の要因や性格などが詳しく話され、幼少時からの育て方の中に問題を指摘されて、ハッと気がついたというのである。『自分が少年時代苦労したので、つい子どもに甘く、気ままにさせ、勉学のことだけに期待をかけすぎた。失敗でした』。そしてA少年自身が専門的調査にさいして、父親への不満として言ったことは、皮肉にも、次のようなことだったという。——父は真面目によく働く人だが、家庭ではまるで芯がないみたい。両親とも、ボクがねだれば、何でも買ってくれた。欲望はなんでもみたされた。それがかえってだんだん不安になり、家庭に対する不満になった——」。(6)

グスタス・フォス氏は『日本の父へ』の中で次のようにのべている。「主に男子の教育に30年ほどたずさわってきた私の経験では、男の子の教育の場合は、父親の役割がとりわけ大きいと思う。しかも、家庭にまで激しい変動をもたらしている現代社会では、その役割は、以前にもましてはるかに大きくなっている。今日こそ、父親は我が子の教育の傍観者であってはならず、直接参加しなければならないのである。これは父親の特権なのであって、母親、ましてや学校の先生に委ねてはいけないうるい任務なのである。」(6)

東京都立竹早高校教頭（1973年当時）の宇野一氏は、少し異なった視点から次のようにのべている。「ここ数年、私は、ものわかりのよい親たちが増えたことにおどろいている。このところ私が接している生徒の親たちは、だいたい大正の後半から、昭和のひとけた生まれの方たちである。この世代の親たちの、なんと物わかりのいいことか、目を見張るばかりである。……明らかに、それらの親には行きすぎがある。思いちがいがある、しかし、私には、その親たちの思考の背景がわかるような気がする。すな

わち、そこには、彼らが若い時に、無理解な親に泣いたことに対する反動があるのだと思う。」⁽⁶⁾

このようにみえてくると、今の父親がすべて不甲斐ないようにみえるが実際はそうではないだろう。10人10色といわれるように、この世は実に多様である。中には、昔からの伝統をふまえて、どっしりと構えている父親もいるだろうし、和やかな雰囲気の中にも、オヤジの権威が保たれている家庭もあるだろう。階層により、家風により、実にさまざまなオヤジ像があるだろうことは想像に難くない。

しかし、総じて、今の父親は戦前に比べれば、影がうすくなったといえる。

これに反して、戦前の父親には権威があった。勿論そこでも様々な父親がいたわけで、一言で律するわけにはいかない。それぞれの家庭、オヤジの人柄によって様々であった。だが、総じてオヤジの存在感は強かった。

このことを語っている人は沢山いるが、ここではその2、3をあげる。

詩人、小野十三郎氏は5人兄弟だが、長男だけが本妻の子で、あとは妾の子であった。幼時は遠縁にあずけられていたが、10才以後に本宅にひきとられることになる。その頃を回想して、氏は次のようにのべている。

「おやじの家は町内では類のない大きなもので、僕は女中や近所の人から突然ボンボンと言われる身分になった。しかし、いやなこともあったな。おやじはその頃、晩酌に2合ほど飲む。食台にごちそうをいっぱい並べてチビリチビリ夕方5時ごろから、9時10時までやる。子どもは全員、その座敷にすわっとらんと、ごきげんが悪い。興がのってくる、母に三味線をひかせて、下手な浄瑠璃をうなり始める。そもそも僕が文楽ちゅうもんがきらいになったのは、おやじのせいや。……兄弟のけじめをつけるのは結構やけど、正月の祝い膳かて、おやじと兄貴のは立派で、僕になると、がぜんちっぽけなものとなり、弟のは更に格が落ちる⁽⁶⁾」中学3年のころ大杉栄全集が出たので、母にそれを買ってというと、それを聞いた父が、「あんな国賊の本、読むことならんと頭から湯気をたてて怒った。……お

やじはやっぱり僕に何らかの影響を及ぼしたんやね。死に顔は安らかなもんだったよ。」⁽⁶⁾

斎藤茂吉の次男、北杜夫氏は次のように述べている。「子供の頃を追想してみると、父は何よりも恐ろしい存在、おっかない存在といえた。父はよく憤怒した。それも全身全霊をこめて憤怒するのである。自分が叱られれば勿論だが、他人が叱られているのを、唐紙ごしに聞いても、やはり背筋が冷たくなる思いがした。……父は父なりに子供たちには愛情を抱いていたのだが、その愛情が強すぎて、私たちにっては、やりきれないものといってよかった。……要するに、そばにいとやりきれない強烈な人間臭を発散していた。」⁽⁶⁾

坪内逍遙の養嗣子、坪内士行氏は次のように回想している。「およそ坪内逍遙ほど、独りをつつしむということを実際におこなっていた人間を私は他に知らない。逍遙はどんな時にもあぐらをかいたことがない。そのころの私にとっては、それはいやはや、どうにもやりきれないお手本で、それを見習わせられる毎日は、子供の私には難行苦行であった。……彼の言葉に従えば、スパルタ教育こそ絶対に必要なものだとの信条のもとに、私をしつけたのである。」⁽⁶⁾

万葉学者、犬養孝氏の回想。「父は待従職として、明治から3代の天皇のおそばにいた。仕事の性質に加えて、典型的な明治気質。仕事から帰った父が玄関に立った瞬間、どんなに騒いでいても、家中が水を打ったように静まり返る。やがて夕食。みんな正座でヒザをくずすことは許されない。ムダ話も、笑うことも御法度。」⁽⁶⁾

こうした権威ある父親は、どこから生まれてきたのか。これは家族制度との関係で考えなければならない。

(二)

家族制度を支えたものは儒教道徳であった。この道徳は、父や夫に対する絶対的服従を要求した。とりわけ、「明治以降になると、徴兵制軍隊に

おける教育や師範教育を受けた教育によって、国民社会全般の中に、家と父の思想が形成されていき、父の像が造出されていく。しかも、国民の大半を占める農業社会においては、固有の生産様式が、この思想を受け入れ、保守化する基盤をもっていたのである。」¹⁰つまり、農業は肉体労働が基本となるから、男が主体となり、父がその中心を占めることになる。生産総量は十分とはいえなかったから、そこを支配する倫理は質素、儉約であり、禁欲・忍耐である。それゆえ、乏しい富の配分をめぐる争いを収拾するためにも、家長たる父の絶対的権威が要請され、秩序を維持する統制、統治の機能が、父の役割となる。

これを背後から支えたのが戦前の家族法であり、そこに規定された強い戸主権である。家業や家産は代々長男に継承され、戸主はその管理者、経営者でもあった。家共同体に属するものは、これを逃れては生きてはいけず、否も応もなく、当然のこととして戸主に従った。

だが、すべての者がこのような在り方で生きたわけではない。江戸落語に登場する熊さん、八つあんの生活もあった。そこでは、亭主が威張ろうにも、当の本人に学問があるわけではなく、代々受けついで財産があるわけでもない。体一つを資本に素裸の形で生きねばならなかった。時には女房の尻に敷かれ、気にいらねば怒鳴りちらす八方破れの父親もいたのである。だが、全体としては、父親が一目おかれる精神的風土であった。

(三)

それが戦後は大きく変わる。自由、平等思想とともに男女平等観が国民の間に浸透した。都市化が進み、多くの者が労働者、サラリーマンとなって都市に集まった。農家の2・3男は、もはや家長に依存する必要がなくなった。女性も戦前に比べれば、経済面で、男性に依存する度合がずっとへった。核家族化が進み、姑に気がねする必要がなくなり、主婦の力が相対的にました。テレビが普及して、家族の生活様式が大きく変った。ほとんどの家庭がテレビを中心に動いている。サラリーマンの家庭なら、父親

は朝早く出勤し、夕方おそく帰宅する。夕食が終ると、疲れた体をテレビの前に横たえ、ダラリとした姿を子供の前にさらすことになる。休日もまた、子供が見るのは、凜々しく働く父親ではなく、なんとなく一日をすどす縮りのない姿である。

戦前は働く父をみることが多かった。農家では父がまず音頭をとって、家族皆で働かないことには事が運ばなかった。商家は農家にもまして、主人の采配が重要な位置をしめる。物をつくる家内業にしても、父親の腕のみせどころはいくらもあった。その上、大家族が多かったので、長幼の序列が実にはっきりとしていた。若旦那は大旦那の前では頭が上がらないし、使用人は主人には絶対服従である。弟妹は兄姉の前では頭があがらないというように、子供たちは日常の生活の中で、目上の人を敬うことをおぼえた。現在の子には、この秩序感がうすれたのではないだろうか。父母の言うことは絶対に聞くものだという風潮がきえた。他方、戦後生まれの親たちは、優しいことは良いことだという風潮の中で育った。目上の者が目下の者を怒鳴りつけるのは、悪いことだというようになった。親たちが、子供を厳しく叱りつけなくなったと言われだして久しいが、その中で育った子供が果して、健全に育っているかどうか。健全に育つ育たぬは、いろんな要素で決まることだから、一言で論じるわけにはいかぬが、一つの要因としては、躰のあり方に問題があることは確かである。その中でも特に、父親の在り方が重要である。

草柳大蔵氏は『男をみる目25章』の中で、今の「大人はものわかりがよすぎはしないか」といっている。若者に対して本当に親切であるのなら、もっと若者に「一喝」をくらわすべきだとおべている。「父親や教師が子供を一喝しない、あるいは、課長が課員を叱らないのは、上の人が下の人に優しくしている姿ではなくて、じつは下の人をもてあそんでいるのではないかと思えるのです。」⁶⁹

「『イギリスの学校生活』を書いたピーター・ミルワードさんは、ご自分が小学校のころ受けた体罰を有効であったと語っている。私もそう思

う。私だけでなく、私の年代のものはほとんど体罰を否定しない。中学校の頃教室で授業を受けていると、窓越しにバシッバシッという音がして……体操の先生が2人の生徒を張り倒しているのが眼に入った。それは文字どおり張り倒すという行為で、頬を殴られた生徒は、横ざまにぶっ倒れたのである。……『愛情があったんだよな』『とにかく、殴っている先生の眼が真剣そのものだったじゃないか』……『純真に相手を思う心がさし出すものならば、何ごとによらず悪かろうはずがない』昔は先生が純真だった。いまの先生に純真さが欠けているというのではない。ただ、生徒に体罰を加える以前に『体罰は教育の手段として正しいか』という意識が脳裡をかすめてしまう。あとで生徒に報復されるかもしれない。父兄がネジ込んでくるかもしれない等の理由はいくらでも並べることができる。……ミルワードさんは、イギリスの学校生活における体罰を紹介したあと、つぎのように結んでいる。『わたしは学校で体罰を与えることには全面的に賛成で、賛成だと公言することにいささかの後ろめたさを感じない。やはり聖書の箴言は正しいのである——笞を惜しめば立派な子供は育たない——のだ』⁶⁸

(四)

「笞を惜しめば子供は育たない」というこの言葉は、おそらく永遠の真理であろう。だが、ここで指摘しておきたいのは、この言葉が万能ではないということである。厳しく育てたが故に失敗した例もまた数限りなくある。厳しすぎて子供がチック症状を呈しはじめたり、大人になってもその後遺症状が残ったり様々である。厳しさの根底には愛情がなければならない。それに劣らず、子供の心と身体への深い理解がなければならない。

次にあげる四つのケースは、いずれも有名な方であるので、見方によれば成功した例といえるかもしれない。結果としては成功した例であっても、当の本人はオヤジを嫌ったり、憎んだりしているのであるから、望ましい父親像とはどうみても言えない。

まず、文学者で法政大学教授(当時)の荒正人氏の回想を紹介する。「わたしの父は農学校の教師でした。厳密に言えば、農業補習学校教員養成所の主事でした。……当時、父の権威はきわめて厳しいものでした。私はなにか悪戯をして、押し入れてしぱりつけられたこともありました。……わたしは、茶碗蒸し、刺身、わさび、のりなどは食べることは許されませんでした。……父は子供たちの面前で、それを平気で食べていたが、子供たちには食べさせようとはしませんでした。父は酒も、煙草も、お茶もよく飲みました。当時は、東北地方では、お茶はあまり飲まず、白湯を飲んでいました。……父が儉約のために、一家でそろって食べぬというのなら、話はよく分ります。だが、父だけがということは、なんといっても納得できませんでした。父は子供たちに愛情をもっているのかと本気で疑ったこともありました。『禁制食物』のために、わたしは強く激しい反抗心を抱きました。父を心の底から憎悪しました。……禁制食物の解除されたのは、わたしが中学3年の時、肋膜炎になり、医者から、うんと栄養をとらねば駄目だと申し渡されてからでした。……父は体の頑健だったためか、病人には余り同情がありませんでした。……紫外線療法というのがあり、一回で一円ずつ払わなければなりませんでしたが。だが、父は余り賛成ではなく、それもやめなければなりませんでしたが。」⁶⁰ 臨濟宗天龍寺派管長、関牧翁氏の回想はこうである。「タタミの部屋で父と2ツ上の私の兄だけがうまいものを食う。敷居を隔てた板の間で母と姉と私と妹と男衆たちが食事をする。父は村に二台しかないアメリカ製の自転車で通勤していたが、帰途タコ足の足など、酒のさかなを買ってくる。兄にはそれを分けてやり、妹にも一切れをまわすが、姉や私は食った覚えがない。食い物の恨みは深いというが、後年岐阜県の寺に入ったとき、和尚がヨウカンなど、物差しで等分して小僧に分けてくれるのを見て、ひどい父だったと改めて思い直した。……私は、おやじがつれなくし、発奮したから今の身になったとは思うが、だからといって感謝する気にはなれぬ。」⁶⁰

シナリオライター松山善三氏の場合は次のようであった。「僕は7人兄

妹の4番目で、母に可愛がられた思い出は沢山あるが、父から好かれた記憶はない。父が溺愛したのは長兄一人である。どこの家でも同じだが、戦前は長男が家督を継ぐという意味で一番大事に扱われた。個人より家が大切な時代であった。子供たちの世界もまた、長男を中心に動いた。……普通一般に親は子供に対して、平等の愛を持つと信じられているけれども、それは真赤な嘘である。僕の父は長兄一人を溺愛し、あとは、十把ひとからげ、好きな子供、嫌いな子供が、はっきりとしていた。僕は先にも書いて通り、父に抱かれた記憶は一度もないから、父にとって、好きな子供ではなかったらしい。僕も父の側へは寄らない子供であった。……わが家では、父の帰宅前に、子供たちの夕食は終わっているのが習いになっていた。父は帰宅すると風呂を浴び、自分のために特別に用意された膳で一人、独酌を楽しんだ。父の膳にのる肴は、僕たちの夕食のお菜とは全く異っていた。……ふと或る日僕は夜半に眼を覚ました。父と母が隣室で口論する声が聞える。低い声であったが、母が父を鋭く追求している。当時の父は、少々金まわりもよく、遊興に走り、ほとんど帰宅する日がなかった。母は嫉妬のあまり、野卑な言葉を発し、父は怒気をまじえて、母の生理にかかわる弱点を言葉にして揶揄した。母の嗚咽が聞える。僕は父を憎み、母を哀れに思った。耳をふさいだ。13歳の時であった。僕はその日から父を正視しない子供になった。」⁶⁶

これらの例とは若干ことなるが、厳しすぎて、子供の心にひずみを残した例もある。心身医学の研究者である池見西次郎氏は慢性スイ炎患者の中には、子供の頃の生育歴に問題がある人が多いと述べている。「……ここで注目すべきことは、一見まともに見え、社会的には過剰適応の状態にある確診例（心身症タイプ）の方に、その成育歴に深刻な問題が多いという事実である。彼らの多くは、きびしい父親と、決して甘やかさない母親に躰けられている。幼児から、きびしい親の期待に添おうと続けてきた努力が、成人後は職場や社会環境への過剰適応へと発展し、それに伴う内的緊張の高まりを、アルコールでほぐすというパターンが定着してしまうよう

である。」⁶⁰

(五)

「答を惜しめば子どもは育たない」とか「オヤジはもっと頑固であれ」とかといえば、単純明快で一本筋が通っているかにみえるが、実際はなかなかむずかしい。厳しさの背後には愛がなければならない。それにもまして、子供の心への深い理解がなければならない。これがあってはじめて、子育ての第一条件はそろうのである。では第二条件とは何か。それは妻の協力である。子育てはオヤジ一人でやるのではない。妻の協力があってはじめてうまくいく。夫婦円満がまず基本である。妻は夫をたて、子育てに終始一貫した一本の筋を通すことが何よりも大切である。

子育ての条件をここでくどくどと述べるつもりはない。これはすでにいろんな形で述べ尽されている。また世人も、理想はこうだということは、それぞれに知っている。要は、実行に移すか否かである。だが、こう言ってしまう身も蓋もない。生身の人間には頭ではわかっている、それをそのまま実行できないことが多い。それでもなお何処かに人生の指針となるものはないかと探し求めるものである。子育てもまた然りである。日々試行錯誤をくり返しながら、子育てを続ける中でどこかに自分たちを十分納得させてくれる子育ての英知はないものかと探し求めるのである。

(六)

ここに二冊の教育書がある。教育書とはいっても、いわゆる学者の書いたものではない。一つは、三浦道明氏の『おやじ帝王学』、他は松沢光雄氏の『男の子を鍛えろ』である。いずれもジャーナリスティックな題名をつけた本だが、中味はうわついたものではない。ここではこの本を紹介しつつ、子育ての在り方を考えることにしたい。子育ての在り方といっても、それはつまるところ夫婦の在り方であり、生き方の姿勢の問題である。

まず、三浦道明氏であるが、氏は滋賀県大津市三井寺の名刹、円満院の第56代門跡である。近江郷芸美術館館長など多方面で活躍している。著書『おやじ帝王学』の目次は次のようになっている。

第一章 おやじは断固、家の中心であれ（自信をもって家風・家訓をつくれ、おやじの尊厳は絶対失うな、おやじには厳しさを母親には優しさを求めるのが子供の本姓、耐える心と耐える身体をつくれ、やたらと子供に迎合するな、子供の前で夫婦喧嘩をするな）第二章 おやじの厳しい生きざまを見せろ 第三章 自らかちとる姿勢を子供に教えよ（遊びを忘れた子供に進歩はない、子供の教育はまず女房教育から、子供は頭ではなく身体で覚える）第四章 親子の考え方の違いを恐れることはない（おやじの男くささを強調せよ、あいさつは人間社会のルールであることを身をもって教えよ、親子の考え方の違いを恐れず考えるところを存分に述べよ）第五章 年をとっても青年の気概を忘れるな 第六章 子供は厳しいおやじが好きである。

以上あげたのは目次の一部である。次に三浦氏の考えがよく出ている文章を紹介してみよう。

「昔は、風呂へ入る順番も、家庭の中でキッチンと決まっていた。まず家長が入り、順位に従って風呂をとった。食事もしかり。ごはんをつけ、おかずを出されるのはまず家長であった。ある家庭の主婦は、一家の主人よりも先に子供のごはんをつけたりおかずを出して平気である。一家の主人は二の次で、子供優先の家庭が増えた。入浴の場合でも、ある家庭では、子供が風邪をひくといけないから父親より先に風呂に入れてくれとか、子供は早く寝るので、お父さんより先に入りなさいとっている主婦がいる。これには賛成できない。……母親がそのようなことをするから、子供は何でも最優先という意識をもち、勝手気ままな気分をおこすのである。これでは、家庭の秩序もつけれない。このような順位不明、秩序不在、つまりは家庭の主軸たる父親不在の家庭に育った子供は、社会へ出てどうなるのだろうか。常日頃、このような家庭の中で中心的に育てられているた

めに、社会へ出てもつい自我が先行しわがままなふるまいをし勝ちになる。……子供には、小さい時から、年長の者に対する、父親に対する、一家の主に対する敬意というものを教えるべきである。どうも、自分の家風に自信がなく近所の家の様子を気にして、他家のやることをまねる家庭が多くなってきている。」⁶⁸「誰が家庭の中心かということは、口で教えるよりも、日常生活の中で体験として肌で知らしめるべきである。それは、小さい時からやるべきで、何ら躊躇も遠慮もいらぬ。そのところが、家庭のさまざまなルールをつくる上での要になるのであるから。……ひとつの定めが、家庭の中に一本買かれることは、それだけその家庭がより強いものになることを意味するのである。もし、子供がそのルールを破った時は、可哀想かもしれないが、食事を一度ぬくとか、外に立たせるとか、冷酷にやることである。獅子は、子を千丈の谷へおとすという。子を思えば故の厳しきである。」⁶⁹「子供にとって父親は、もっとも尊敬すべき、たくましい頼り甲斐のある存在であるべきである。ところが最近、その父親自体が子供に対して自信を喪失し、迎合する傾向があるが、これは一体どうしたことだろう。……母親は間違っても、子供の前で、父の存在の尊厳性を傷つけるような言葉をはいてはならない。……これら母親の愚痴を常日頃耳にしている子供には、気づかぬうちに母親と伍して、父親を馬鹿にする心がめばえる。」⁷⁰「夫婦喧嘩の絶え間ない家に、よい子供が育つはずがない。子供にとって親は、常に尊敬する存在だからである。その両親が、口汚く喧嘩をするのは、子供にとって幻滅以外の何ものでもない。確かに親も人間であるから、喧嘩もするだろう。しかし、夫婦喧嘩だけは、子供に見せるべきではない。……夫婦喧嘩をみていて、子供はまづどうしようもない疎外感に襲われるものである。意外な親の嫌な面をみるのであるから、子供は子供なりに淋しい思いをしているに違いない。……夫婦喧嘩の多い家庭の子供には、どこか孤独な淋し気なところがある。夫婦がいがみあいをやっている時、子供は全く孤独である。遊ぶこともならず、勉強にも手がつかず、手もちぶさたな時間である。かといって、喧嘩

に介入して、どちらかに味方するわけにもいかない。」⁹³ 「あいさつしなければならぬということは、感覚的に分かっていても、あいさつの習慣をつけなければ、あいさつはついやらずじまいとなる。家庭の主軸たるおやじは、なすべきことをキチンと厳しくなすようにしていかないと、挨拶一つできないいいかげんな子になる。あいさつがキチンとできること、自分の持ち物を大切に扱うこと、食事の作法、箸の持ち方に至るまで厳しくしつけるべきである。……このようなことをいうとかつての、修身教育の復活だという人がいる。決してそうではない。これは子供が社会に出ていく前に叩きこんでおくべき基礎的資質である。そのためには親自身も日常生活で厳しく自らを律する必要がある。」⁹⁴

次に、松沢光雄氏であるが、氏は東京都の今川中学校校長、教育庁人事部主事を歴任した方である。氏の考えは『男の子を鍛えろ』の第三章に一番よくあらわれているので、この章のみ紹介することにしたい。

第三章 鍛える家庭教育の成りたつ17の条件 1、子供が両親を尊敬していること 2、父親は母親を尊敬すること 3、親が子にしてはならない三つのこと 4、男の子は父親が鍛えて体力をつけよ 5、父親は子供と遊ぶことを忘れるな 6、やったらダメなことはあくまでさせるな 7、金銭が子供を破壊することを知れ 8、辛抱強さが信念ある子供を育てる 9、生活態度をキチンとすれば学力はつく 10、自制力は実践とおおして養え 11、家庭では子供と明るく話し合え 12、時間を守ってけじめある生活をさせよ 13、正しい姿勢で度胸をつける 以下省略。

次に、松沢氏の考えがよくあらわれている文章を一部紹介してみよう。「親が子どもを教育する場合、絶対に必要な条件がある。その条件がなければ家庭教育は成立しない。その条件とは、子供が親を尊敬しているということである。換言すれば、子供に尊敬されている親でなければ、家庭教育はできないということである。これが家庭教育の絶対的条件である。尊敬していなくても、子供は日常生活では、親の指示に従う。けれども、子供が親を尊敬している場合でなければ、しつけにならない。……母親につ

いてみると、正直で、正しく生き、一生懸命に家事につとめてやまない母であることが尊敬に値する。正直で愛情にみちていることで十分なのである。口で言うことと、行なうことが違ってない母親、しかも、人知れず誠実につくして、自らの安逸を求めない母親、そのような母親は、どのように子供が成長しても、絶対的な尊敬の対象である。……父の場合は仕事一途に打込んでいることが尊敬の対象である。仕事を愛し、仕事をしすぎて時には家族を困らすほどに、打込んでいる父が家族の長としての資格がある。……だが、この父と母は、この条件だけでは、まだ子どもの気持を満たすことはでき難い。子どもは、両親が心から信じ合い、一体となって生きている姿をみなければ尊敬しないのである。すなわち、両親というものは、父として尊敬され、母として尊敬され、さらに夫婦として尊敬されるという三つの尊敬が結合していなければ、子どもの尊敬を得ることはでき難いのである。……父親は子供の前で、母親を叱ることを、どんな場合であれ、つつまなければならぬ。母親は、子供にしつけをする立場にある。しつけをするものは尊敬を受けていなければならぬ。母親が尊敬されていなければ、子どもは母親の言うことを軽くみて、身を入れて聞かないのである。……子供はともすると、母親を馬鹿にする傾向をもつ。子供は大きくなるにつれて、母親をばかにする傾向をみせる。このとき、それを許さないのが父親の役目である。もし子供が母親をばかにする様子を見せたら、父親は直ちに子供の態度を叱ることが必要である。常に父と母が一体で、母の指導は父の意志を含んでいることを、子供にはっきりと知らせなければならぬ。」⁸⁰「生活態度ができていれば、自然にしていってぐんぐんと学力がつく。それは、子どもの生活は一元的なものであるからである。もし、生活をきびしく引締めてくれる学校があったら、そこに入學させておけば、子供の人間性が鍛え直される。そのことによって学校における学習態度が向上し、力が集中的に学習活動にそそぎ込まれる。」⁸¹「子供の心の状態は、姿勢に左右される。姿勢が正しければ心が安定し、姿勢が崩れていれば心が崩れてくる。現在の学校では、正しい姿

勢ということをお教えることが少ない。このため家庭で、このことをよく指導することが必要である。」⁶⁴

以上、松沢、三浦両氏の教育観を紹介した。そこで述べられているのは、オヤジよ一家の大黒柱たれということである。これは真理であろう。だが、現実はそのとはいかない。夫婦の組み合わせはさまざまである。組合せがさまざまということは、家庭のあり方、そこでのオヤジの役割もさまざまということである。かくあるべしと一色で塗りつぶすことはできない。人類の歴史をふりかえっても、そこにはまことにさまざまな夫婦の組み合わせがあったし、オヤジのあり方があった。その中で子供は育ったのである。その中から偉大なる人物も生まれたし、凶悪な人物も生まれた。この環境だと、こういう人物が育つということは大雑把には言えても、確実に言えない。そこには偶然の要素がはいる。我々としては、先人の知恵は大いに学ばなければならないが、最後は、夫婦で独自のものを築いていく以外にない。どんなに良き知恵でも、それをそのまま真似ることはできない。その知恵が生みだされるまでには、幾多の血と汗が流されているのだ。子育てもまた然りである。どんなに良き子育て論をきいても、それをそのまま実行できる人はいない。子育てはあくまでも手作りでいく以外にない。こうして育てた結果が、喜ばしいものとなるか否かは、人知の及ばざるところである。うまくいけば天に感謝し、失敗であればその責を自分たちで負う以外にない。

こうした私の考えに、比較的近い二人の方の子育て論を紹介して、本稿をとじたい。

まず評論家、樋口恵子氏の子育て論。「私の育児のモットーをいわせていただければ、手なりのマージャン、……つまり、マージャンというのは、いろんなあがり方があるのであって、あがろうと思ったら、時々刻々変わっていく手に逆らわず、手なりで、最もふさわしい手を加えて行く。育児も全く同じだと思うのね。……子どもは皆違う。その個性に逆らって、持って生まれた性分を変えようとするのは、大変なことですよ。もの

静かな子を、はしやぎ過ぎにするのは大変だし、その逆もまた同じ、せめて、過ぎないようにして、持ち味のよさを伸ばすのが、コツですよ。子育てのあがりの道は、いく通りもある。……うちは徹底的に違う親子ね。彼女は小さいころは落ち着きがないし、土いじくったり、トンボ追いかけたりが大好き。ガリ勉なんか絶対やらない。私は平凡な負けずぎらいで、土台、見栄ってものがあらあな、ってなもんで仕事しているところあるわ。彼女は、そんなの全部、母親の胎内に置いてきちゃった。…小さい時の落ちつきのなさは、気の弱い親なら首くくっちゃうくらい。3年生の時、授業参観に行ったら、彼女だけ後ろ向いて男の子の筆箱なんかいたずらしている。先生が怒って、コラー、樋口、ちゃんと向く方、向かんかといったら、あの子どうしたと思います。イスを後ろに向け直して座っちゃった。その晩、うちはもう修羅場。おばあちゃんと私で、泣きしゃべりの新派悲劇ですよ。親の美学で日本舞踊を習いに2年半通わせた時も、悪態はつくわ、乱暴は働くわ……夜12時ごろまで小言を言ったこともある。そうしたら6歳のあの子、最後に歌うように、子どもにもアタリとハズレがあつてね。あんた、どっちよ、と聞くと、ワタシハズレ、残念でした。6歳で引導渡されちゃった。……（今は大学生）いま、彼女の最大の長所は、泰然と落ちつき払い、決して物に動じないこと。昔の落ち着きのなさはどこにいっちゃったのよと聞くと、——人の落ち着きのなさは一生の持ち分があつて、私は最初の10年で使い果たしちゃった。ま、いろいろあらあな——と。ホント、子育ては、子なりに、家なりに、育児は育自、教育は共育なのですよ。」⁶⁴

次は、評論家、俵萌子氏の子育て論。「私の子育ては、失敗の連続よ。ハッと気がついて、やり直しての繰り返し。それというのも、子育てというのは、手さぐりの作業でしょ。ひとりひとり処方せんが違う。上の子でうまく行っても、下の子の場合は通用しない。そのうえ、親は自分の体験を基準にして子育ての方法を決めて行く。ところが、親と子どもじゃ、育った社会的背景が全く違うから、親のものさし通りにはいきっこないんで

す。……親ができることって、子どもに、いろんな出会いのチャンスをつくってやることぐらいかな。娘が進路選択で悩んでいたとき、日本の大学じゃダメと、アメリカ行きをすすめたのは私だけど、これはうまく行っみたい。英語は3だったのが、やる気を出し、将来はヨーロッパででも勉強したいと言いつけているから。……でも長女も長男も、ここまでくるには、キャーとかピーとか、私もさんざん言いあってね、大変だった。わが子を落ちこぼれと見るのはいけないことだけど、わが家の二人は、はみ出し子ね。……子育てというのは、後半がむずかしいの。子どもが小さいうちは、何が問題か見えにくい、そのツケはちゃんと後で出てくるのよ。」¹⁰⁾

注

- (1) 俵萌子 『父原病の子どもたち』 学習研究社 1981年 32頁—33頁
- (2) 鈴木秀男 『幼時体験』 講談社 昭和56年 195頁
- (3) 森田宗一 「非行少年にみる父親像」『父親の役割』 金子書房 昭和56年 182頁—183頁
- (4) グスタス・フォス 『日本の父へ』 新潮社 昭和52年 12頁
- (5) 宇野一 「子として父として」『これからの親子』 明治図書 1973年 22頁
- (6) 朝日新聞社編 『父ありき』 創元社 昭和49年 103頁
- (7) 同上 103頁—104頁
- (8) 朝日ジャーナル編 『おやじ』 秋田書店 昭和39年 18頁—23頁
- (9) 同上 172頁
- (10) 前掲書 『父ありき』 126頁
- (11) 海老原治善 「現代社会における父の座とその役割」『子どもと父親母親』 金子書房 昭和51年 4頁
- (12) 草柳大蔵 『男を見る眼25章』 大和書房 1980年 40頁—41頁
- (13) 同上 35—37頁
- (14) 荒正人他 『私の心に残る父の教育』 明治図書 1973年 6頁—15頁

- (15) 前掲書 『父ありき』 97頁—98頁
- (16) 人生読本『父親』 河出書房新社 昭和54年 35頁—36頁
- (17) 池見酉次郎 「福岡つれづれ」 朝日新聞夕刊 1982年3月10日
- (18) 三浦道明 『おやし帝王学』 日新報道 昭和52年 14頁—15頁
- (19) 同上 16頁—17頁
- (20) 同上 18頁—19頁
- (21) 同上 40頁—41頁
- (22) 同上 80頁
- (23) 松沢光雄 『男の子を鍛えろ』 評言社 昭和49年 84頁—88頁
- (24) 同上 130頁
- (25) 同上 144頁
- (26) 朝日新聞編 『私の子育て論』 講談社 昭和56年 68頁—70頁
- (27) 同上 80頁—82頁